八街市楽ケ谷Ⅰ遺跡

― 滝台第６加圧機場建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 ―

平成27年11月

農林水産省　関東農政局　北総中央農業水利事業所

公益財団法人　千葉県教育振興財団

八街市楽ケ谷Ⅰ遺跡

やちまたしらくがやいち

— 滝台第６加圧機場建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

序　文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第747集として、農林水産省関東農政局北総中央農業水利事業所の滝台第6加圧機場建設に伴って実施した八街市楽ケ谷Ⅰ遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代の陥穴や奈良・平安時代の集落跡が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成27年11月

公益財団法人　千葉県教育振興財団
理事長　堀田弘文

凡　例

1　本書は、農林水産省関東農政局北総中央農業水利事業所による滝台第6加圧機場建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県八街市滝台455の一部に所在する楽ケ谷Ⅰ遺跡（遺跡コード230－007）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、農林水産省関東農政局北総中央農業水利事業所の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者・実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆・編集は、整理課長　岸本雅人の指導のもと、主任上席文化財主事　糸川道行が担当した。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、農林水産省関東農政局北総中央農業水利事業所及び八街市教育委員会の御指導、御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は以下のとおりである。

第1図　国土地理院発行　1：25,000 地形図「八街」（N1－54－19－11－3）

国土地理院発行　1：25,000 地形図「東金」（N1－54－19－11－4）

8　調査地周辺の航空写真は、京葉測量株式会社が平成12年1月に撮影したものを、約1/10,000に拡大して使用した。

9　本書で使用した座標はすべて世界測地系に基づく平面直角座標（国家標準直角座標第Ⅸ系）で、図面の方位はすべてその座標北を示す。

10　図の表現の用例は、図中に指示しているものを除いて以下のとおりである。

カマド（袖）　● 土器・瓦

焼土範囲　☆ 鉄製品

本文目次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査の概要……1
　　1　調査の経緯と経過……1
　　2　調査・整理の方法……1
　　3　基本層序……2
　第２節　遺跡の位置と環境……2
　　1　遺跡の位置と地形……2
　　2　周辺の遺跡……5
第２章　縄文時代……7
　第１節　陥穴……7
第３章　奈良・平安時代……8
　第１節　竪穴住居……8
　第２節　掘立柱建物及びピット群……12
第４章　まとめ……14
　第１節　楽ケ谷Ⅰ遺跡の様相について……14
　第２節　楽ケ谷Ⅰ遺跡をとりまく歴史的様相について……17
報告書抄録……巻末

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡……3
第２図　調査地周辺の地形……4
第３図　遺構全体図……5
第４図　旧石器時代確認調査区位置図……5
第５図　立川ローム層土層断面……6
第６図　SK001……7
第７図　SI001……9
第８図　SI002……12
第９図　掘立柱建物及びピット群……13
第10図　工事立会分全体図……15・16
第11図　工事立会分の出土遺物……17

図版目次

図版１　調査地周辺の航空写真
図版２　遺跡遠景（南から）
　　遺跡近景（西から）
　　立川ローム層土層断面
　　SK001
　　SI001全景
　　SI001カマド土層断面
　　SI001カマド
　　SI001カマド掘方
図版３　SI001掘方
　　SI002全景
　　SI002カマド土層断面
　　SI002カマド
　　SI002カマド掘方
　　SB001・002・004
　　SB003
　　発掘風景
図版４　出土遺物

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１　調査の経緯と経過

農林水産省関東農政局北総中央農業水利事業所は、千葉県八街市滝台において、農業用水配水用加圧機場の建設を計画した。実施に当たり、千葉県教育委員会へ事業予定地内の埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した結果、予定地内には楽ケ谷Ⅰ遺跡が所在する旨、回答があった。千葉県教育委員会は農林水産省関東農政局北総中央農業水利事業所とその取扱いについて協議した結果、記録保存の措置を講ずることとし、発掘調査を公益財団法人千葉県教育振興財団に委託した。

今回報告する内容は楽ケ谷Ⅰ遺跡の発掘調査成果である。発掘調査及び整理作業に関わる期間・担当者及び作業内容などは以下のとおりである。

平成 27 年度　文化財センター長　小久貫隆史

整理課長　岸本雅人

調査期間　平成 27 年６月１日～平成 27 年６月 24 日

調査面積　（規模）71.73㎡　（確認調査）上層 71.73㎡ /71.73㎡・下層４㎡ /71.73㎡

（本調査）上層 71.73㎡・下層０㎡

調査担当者　麻生正信

整理期間　平成 27 年６月 25 日～平成 27 年８月 31 日

整理内容　記録整理・水洗・注記・分類・接合・復元実測・拓本・トレース・写真撮影・挿図作成・図版作成・原稿執筆・編集

整理担当者　糸川道行・麻生正信

２　調査・整理の方法

発掘調査は、農林水産省関東農政局北総中央農業水利事業所から世界測地系に基づく基準点・水準点の測量成果を得て、当財団が調査区内の必要な地点に２本の基準点を打設して調査を実施した。２本の基準点のＸＹ座標は、１本がＸ＝ -45,260、Ｙ＝ 44,448 である。この点の北緯は 35 度 35 分 28 秒、東経は 140 度 19 分 26 秒である。もう１本の XY 座標はＸ＝ -45,260、Ｙ＝ 44,444 である。事業者提示の水準点の標高は 60.635 ｍである。なお調査区内の面積が狭小であるため、大グリッド･小グリッドの設定をしていない。

発掘調査は調査面積が狭小であることから、上層の確認調査として調査区内全域の表土除去を行った。その結果、調査区内全域に遺構が確認されたため、全域が本調査対象範囲となった。下層の確認調査としては、２ｍ×２ｍ四方のグリッドを１か所設定して確認調査を実施した。調査区内の面積の約 5.5％にあたる確認面積であるが、旧石器時代の石器は検出されなかったため、確認調査で終了した。

検出された遺構は、縄文時代の陥穴１基、奈良・平安時代の竪穴住居２軒、掘立柱建物４棟、ピット群である。遺構番号は陥穴が SK001、竪穴住居が SI001･SI002、掘立柱建物が SB001 ～ SB004 である。個々のピットについては特に遺構番号を付与していない。ピット群については、遺物の出土が少なく、時期が不明瞭である。しかし奈良・平安時代の竪穴住居が近隣に存在し、調査区内が狭小という制約もあること

から本来は奈良・平安時代の掘立柱建物の柱穴の可能性が考えられる。したがって、すべて奈良・平安時代の章で記述した。

遺物の注記はすべて発掘調査時の遺構番号のままである。遺物の注記は、遺跡コード、遺構番号、遺物台帳に記載された遺物番号を順に書き込んだ。表採の遺物についてはヒョウサイと片仮名で注記した。なお鉄製品については直接書き込むことが好ましくないため、遺物ケースに調査時のラベルを収納した。

土器・鉄製品等の実測はすべて手計測による。その後、遺物の拓本、遺構及び遺物等のトレース、挿図作成、写真図版作成、原稿執筆を行い、本報告書の刊行となった。

3　基本層序（第５図）

旧石器時代の石器は出土していないが、立川ローム層の基本層序の概略を記述する。

Ⅲ層は黄褐色土で、ソフトローム層である。Ⅳ層は明黄褐色土で、上部はソフト化が著しい。Ⅴ層は黄褐色土で、第１黒色帯に相当する土層であるが、あまり黒みは強くない。赤色スコリア粒を微量に含む。Ⅵ層は黄褐色土で、ＡＴ（姶良丹沢火山灰）を含む土層である。Ⅶ・Ⅸ層は第２黒色帯である。Ⅸ層は赤色スコリア粒・黒色粒を多く含む。Ⅶ層・Ⅸ層と順に黒みを増すが、千葉県北西部のローム層と比べると黒みは弱い。Ⅷ層は存在しない。Ⅹ層は暗黄褐色土で、立川ローム層最下層である。Ⅺ層は暗黄褐色土で、Ⅹ層に比べて軟質である。武蔵野ローム層最上層である。確認グリッドはⅪ層の上部まで発掘した。

第２節　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と地形

楽ケ谷Ⅰ遺跡は八街市の南東端部に位置し、遺跡の南側は東金市に広がっている。八街市は千葉県中央部やや北東寄りに位置する。市域の北部は富里市、酒々井町、東部は山武市、南東部は東金市、南西部は千葉市、北西部は佐倉市に隣接している。遺跡の所在する台地の北方 0.4km には現在千葉東金道路がほぼ東西方向に存在し、西方 0.3km には国道 409 号線が南北に縦断している。

楽ケ谷Ⅰ遺跡は太平洋に注ぐ真亀（まがめ）川の支流に開析された標高 60 m の台地上に立地する。この台地上は下総台地南東端部といえる位置でもあり、下総台地としては、標高がかなり高くなっている地点の一つである。

真亀川は下総台地の内部を源流として、太平洋に注ぐ河川の一つである。本遺跡は大きくみれば真亀川の源流と真亀川の南方に位置する南白亀（なばた）川の源流にはさまれた台地上に位置する。しかし遺跡の北方には真亀川によって開析された支谷が延びてきており、本遺跡は真亀川水系の遺跡といえるであろう。北方の支谷との比高は 14 m であり、この地点ではあまり差が大きくない。

真亀川によって開析された支谷は、調査区の北方約 150 m のところに東から西に向かって入ってきており、調査区は楽ケ谷Ⅰ遺跡が所在する台地全体では北端部に位置するといえよう。

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡（S=1/25,000）

第２図　調査地周辺の地形（S=1/2,500）

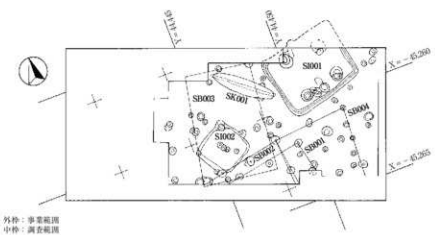
2　周辺の遺跡（第１図）

調査区内で主体的に検出されたのは、奈良・平安時代の集落の一部であり、ここでは奈良・平安時代を主体に、縄文時代を補足的に記述したい。

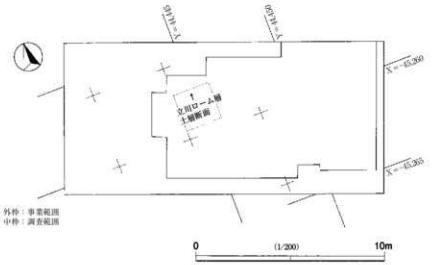
本遺跡（１）周辺の遺跡としては、まず調査地点の東方に位置する滝台遺跡（３）があげられる。調査地点東約 0.6kmの地点からは「山邊郡印」が出土しており[1]、本遺跡周辺が上総国山邊郡に属する可能性が高いことを示していると思われる[2]。

また滝台遺跡は未報告であるが、古墳時代後期から平安時代にわたる竪穴住居が発掘されている。その数は 60 余軒であり、その中には５軒の製鉄関係遺構が含まれているという。

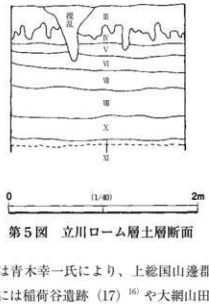
本遺跡周辺の台地上には、広く奈良・平安時代の包蔵地が存在しているとみられる。調査された遺跡は八街市側では少なく、南東の東金市側で多い。本遺跡の東方やや南の地点には楽ケ谷Ⅱ遺跡（２）が所在し、南には外荒遺跡（４）[3]が所在する。また東方やや南寄りのところには菅谷古墳群及び南外輪戸遺跡（５）[4]が所在する。本遺跡の南東には滝東台遺跡（９）[5]が所在し、その南には油井古塚原遺跡（10）[6]が所在する。外荒遺跡の南には滝木浦Ⅱ遺跡（６）[7]や滝木浦遺跡（８）[8]、作畑遺跡（７）[9]が所在する。また、南やや西寄りには前畑遺跡（11）[10]が所在する。



第３図　遺構全体図



第４図　旧石器時代確認調査区位置図



第５図　立川ローム層土層断面

東金道路（二期）関係の調査では前畑遺跡以外に多くの遺跡が調査されているが、そのうち奈良・平安時代の遺構が出土した遺跡として図示したのは大谷台遺跡（12）と新堀遺跡（13）の２か所である[11]。

縄文時代の遺跡は南外輪戸遺跡・油井古塚原遺跡で検出されている。また東金道路（二期）関係では前畑遺跡・大谷台遺跡・新堀遺跡のほかは図示していないが、多くの遺跡で包含層出土の土器が検出されている。

本遺跡からはやや離れるが、奈良・平安時代の集落が検出された遺跡としては、前畑遺跡の南方に鉢ケ谷遺跡（16）[12]、羽戸遺跡（15）[13]、尾亭（おてい）遺跡（14）[14]がある。なかでも鉢ケ谷遺跡は青木幸一氏により、上総国山邊郡岡山郷の中心集落と目されている[15]。また鉢ケ谷遺跡のさらに南方には稲荷谷遺跡（17）[16]や大網山田台遺跡群がある（18～24）[17]。

さらに前畑遺跡の2.4km西方には、図示できなかったが、山田水呑遺跡が所在する[18]。山田水呑遺跡は山邊郡山口郷関連または山邊郡関連の遺跡と推定されている。

第１図掲載遺跡一覧

1.薬ケ谷Ⅰ遺跡　2.薬ケ谷Ⅱ遺跡　3.滝台遺跡　4.外荒遺跡　5.菅谷古墳群・南外輪戸遺跡　6.滝木浦Ⅱ遺跡
7.作畑遺跡　8.滝木浦遺跡　9.滝東台遺跡　10.油井古塚原遺跡　11.前畑遺跡　12.大谷台遺跡　13.新堀遺跡
14.尾亭遺跡　15.羽戸遺跡　16.鉢ケ谷遺跡　17.稲荷谷遺跡　18～24　大網山田台遺跡群　18.№３地点
19.№４Ｂ地点　20.№６地点　21.№８地点　22.№９地点　23.№10地点　24.№11地点

注１　丸子亘　1961「新発見の『山邊郡印』をめぐって」『古代文化』第21巻第１号
　　平川南　1999「古代郡印論」『国立歴史民俗博物館研究報告』第79集
　　栗田則久　2012「律令時代の八街－山邊郡印－」『図解　八街の歴史』八街市郷土資料館
注２　注１丸子　1961に同じ。
注３　矢戸三男　1988『東金市・外荒遺跡発掘調査報告書』（財）千葉県文化財センター
注４　中西克也ほか　1985『東金市菅谷古墳群及び南外輪戸遺跡　滝・木浦Ⅱ遺跡発掘調査報告書』東金市菅谷古墳群及び南外輪戸遺跡調査会
注５　平山誠一　1986『千葉県東金市　滝東台遺跡　油井古塚原遺跡』（財）山武郡南部地区文化財センター
注６　注５前掲書。椎名信也ほか　1995『油井古塚原遺跡群』（財）山武郡市文化財センター
注７　注４前掲書。
注８　椎名信也　1996『滝木浦遺跡』（財）山武郡市文化財センター
注９　桐谷優ほか　1986『作畑遺跡発掘調査報告書』作畑遺跡調査会
注10　香取正彦ほか　2002『千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書９　－東金市前畑遺跡・羽戸遺跡－』（財）千葉県文化財センター
注11　加藤正信ほか　1998『千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書２　－東金市大谷台遺跡他18遺跡－』（財）千葉県文化財センター
注12　青木幸一ほか　2000『小野山田遺跡群Ⅰ　－鉢ケ谷遺跡－』（財）山武郡市文化財センター
注13　青木幸一　2001『小野山田遺跡群Ⅱ　－羽戸遺跡－』（財）山武郡市文化財センター

注 14　木川浩司ほか　2001『小野山田遺跡群Ⅲ　－尾亭遺跡－』（財）山武郡市文化財センター
注 15　青木幸一　2009「「墨書文字」からみた地方支配体制の一考察－９世紀の上総国山邊郡－」『研究ノート山武特別号』（財）山武郡市文化財センター
注 16　椎名信也ほか　2002『小野山田遺跡群Ⅳ　－稲荷谷遺跡－』（財）山武郡市文化財センター
注 17　小林清隆ほか　1995『大網山田台遺跡群Ⅱ』（財）山武郡市文化財センター
　　渡辺修一ほか　1996『大網山田台遺跡群Ⅲ』（財）山武郡市文化財センター
　　石本俊則ほか　1997『大網山田台遺跡群Ⅳ』（財）山武郡市文化財センター
注 18　松村恵司ほか　1977『山田水呑遺跡』 山田遺跡調査会

第２章　縄文時代

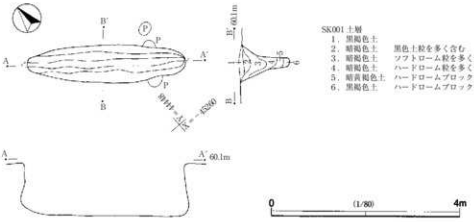
第１節　陥穴

発掘区内で検出された縄文時代の遺構は陥穴１基である。

SK001（第６図、図版２）

形態は長楕円形である。確認面での長軸の長さは 3.37 m、短軸の長さは 0.8 m である。底面の長さは長軸長 3.51 m、短軸長 0.15 m、確認面からの深さは最深部で 1.12 m である。底面の両端部が上方よりも奥にえぐれて縦断面形が袋状を呈する。底面は緩やかに中央部が低くなる。中位の屈曲部はハードローム上面と同一面である。堆積土は最下層がハードロームブロックを少量含む黒褐色土、下層がハードローム主体の土層である。中層もソフトローム粒・ハードローム粒を多く含む暗褐色土である。中・上層はレンズ状に堆積する。

遺物の出土はなかったが、形状から縄文時代の遺構と判断した。南東部で二つのピットと重複しているが、ピットは奈良・平安時代など後世のものとみられる。



第６図　SK001

第３章　奈良・平安時代

第１節　竪穴住居

調査区内で検出された奈良・平安時代の竪穴住居は２軒である。１軒は調査区北東側、もう１軒は調査区中央やや南寄りに位置する。相互の距離はかなり近く、千葉県教育庁文化財課の工事立合による竪穴住居等の分布を考慮すると密度の濃い分布である。

個々の遺構の記述をする前に計測値その他について若干の説明を行う。規模については主軸長、副軸長で表した。これは壁上端間の数値であるが、カマドの突出部を含めない。主軸方向は、原則としてカマドに対面する辺から直交してカマド中心に向かう方向とし、北からの方位を記述した。副軸は主軸に対して直交する方向とした。壁上端での面積はカマドの突出部を含めている。また壁の直下内を床面の面積として計測した。竪穴住居の深さは確認面からの最大深度を記述した。竪穴住居内での位置関係については、東西南北のほか、左右及び前・奥（後）を使用した。後者についてはカマドの対壁、通常は出入口側からカマドに向かった状態での方向である。通常４か所の主柱穴については、右奥側のものから右回りにP1・P2・P3・P4とした。

竪穴住居を構築するために地山を掘削した後、床面を整えるために充填された土を貼床、最初に掘削された地山の底面を掘方と記述する。

SI001（第７図、図版２・３・４）

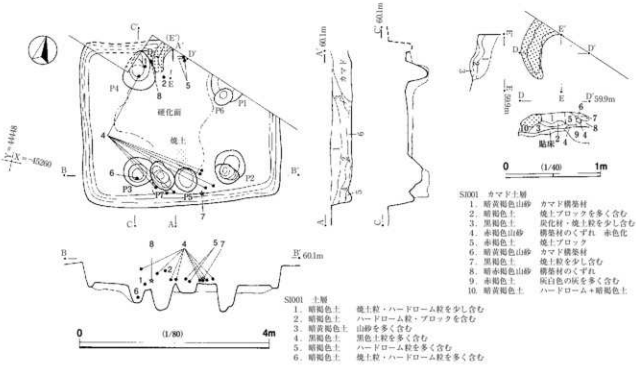
形状・規模　主軸長は3.52 m、副軸長は4.15 m、主軸方位はN -15° - Wである。確認面から貼床上面までの深さは40cmである。平面形については横長の方形であるが、北東側と北西隅部近くが調査区外のため完掘していない。面積は、確認面で推定14.4㎡、床面で13.2㎡程度と推測できる。

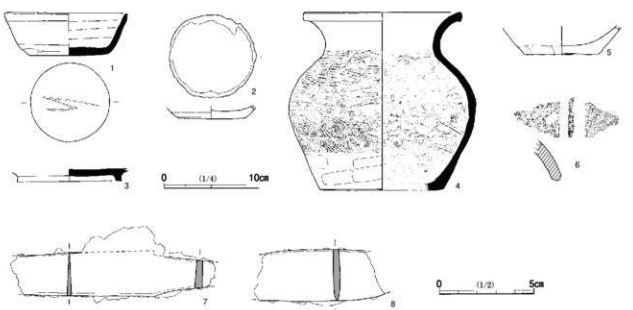
床面・壁溝　床面はおおむね平坦であるが、北東側がやや低い。また南壁際中央に位置する出入り口ピット（P5）まわりの床面がドーナツ状にやや高くなっている。カマド前から出入り口ピットにかけて硬化面が広がる。出入り口ピットの奥側の床面に若干焼けている範囲がみられた。壁溝は調査範囲内では途切れずに巡っており、全周すると思われる。床面は南側と東側の主柱穴間を主体として不整に掘り窪められており、その上にロームブロック主体の暗黄褐色土が充填されて、貼床として整えられている。その掘方面は不整であるため特に図示していないが、ハードローム層上面に達し、凹凸が著しい。貼床の厚さはおおむね10cm弱～20cmである。

柱穴　主柱穴が４か所検出された。しかし北側の２か所は一部が調査区外にかかるため完掘できなかった。P1は楕円形になると思われるが、床面での推定の短径が65cm、床面からの深さは41cmである。P2は楕円形で、径が74cm×65cm、深さは60cmである。P3はほぼ円形で、径が62cm、深さが44cmである。P4は不整な楕円形で、径は73cm×72cm、深さが42cmである。主柱穴に囲まれた床面積はおよそ４㎡である。出入り口ピット（P5）の径は53cm×46cm、深さは22cmである。

貼床を剥がしたところ、２か所のピットを検出した。P6は楕円形でP1近くに位置する。径は40cm×32cm、掘方面からの深さは33cmである。P7はP5の左（西）側に位置し、不整な楕円形である。径は66cm×45cm、深さは50cmである。

カマド　北壁中央に位置する。煙道部は調査区外に位置するが、プランからは壁より若干突出している





第7図　SI 001

程度と思われる。左袖は遺存するが、右袖は壊されており、遺存しない。左袖山砂部分の下方はハードロームが削り残されており、袖の基部を構成している。カマド内底面においては火床部の被熱痕跡はみられない。カマド内堆積土は上層が山砂を多く含み、天井部等の構築材が崩落したものとみられる。中層は焼土ブロックを多く含むが、下層は黒褐色土で、少量の炭化材と焼土粒を含むのみである。右袖部分は山砂や焼土、黒褐色土が複雑に堆積している。

堆積土　暗褐色土・黒褐色土主体で、ハードローム粒・ハードロームブロック・焼土粒を含む。上層は

ローム・焼土の含有が少量であるが、下層はローム・焼土を多く含む。

出土遺物　図示した遺物は８点である。１は須恵器杯、２はロクロ土師器杯、３は須恵器高台付杯または盤、４は須恵器甕、５は土師器甕、６は丸瓦、７・８は鉄製品である。

１は口縁部の 1/4 を欠く。ほかに口縁部の一部をわずかに欠くが、それ以外は破損もない土器である。器形は底部が大きく、やや箱形を呈する土器である。口縁部径は 12.9cm、器高は 4.4cm～ 4.6cm、底径は 8.4 cmである。底部外面に大きくヘラ書きがみられる。図では横方向に図示したが、縦方向に「リ」の字的に見た場合、書き順は「リ」の左上から左下に至り、次に右上に至り、最後に右下までの一番長い線を刻んだものとみられる。底部外面全面と体部外面下端に手持ちヘラケズリが施されている。底部の切り離し技法は不明である。色調は黒褐色から暗黄褐色を呈する。胎土は比較的密であるが、やや粒径の大きな茶褐色粒を含む。全体に白色粒も目立つ。器面はざらつく質感である。焼成は良好であるが、須恵器とするとやや軟質である。外面の一部に火襷痕がみられる。なお口縁部の欠損部は意図的に打ち欠きされた可能性が考えられるが、断定しがたい。色調から土師器の可能性も考えられるが、黒褐色の部分が多いことや、火襷痕などから須恵器と判断した。須恵器であるならば下総産である。ただしその場合、下総に近い上総国南河原坂窯を含める。

２はロクロ土師器杯の底部を主体とする破片である。体部下位から底部にかけては２片に割れているが、接合して遺存している。底径は 7.4cmである。底部外面は全面に不定方向の手持ちヘラケズリが施されている。切り離し技法は不明瞭であるが、わずかに残る痕跡から回転糸切りと思われる。色調は黄褐色である。胎土は比較的密で、褐色粒・白色粒・黒色粒を含む。焼成は良好である。破断面をみると、1/2 以上が加工されて意図的に円盤状に仕上げられたように思われる。土器を加工した円盤状の土製品とみた場合、径は 8.8cm～ 9.1cm、高さは 1.3cmである。

３は高台の付く須恵器の底部破片である。体部以上がほとんど遺存しないため、高台付杯か盤か断定しがたい。底部は 1/3 程度の遺存である。高台部径は推定 11.0cmである。高台は底部外周際に貼り付けられていると思われ、高台から上方へはすぐに体部に至ると思われる。高台部を除く底部外面は全面に回転ヘラケズリが施されている。底部の切り離し技法は不明である。高台部はナデが施されている。内面もナデが施され、滑らかな質感である。転用硯の可能性があるかもしれない。色調は灰色であるが、外面の一部に灰褐色の部分がみられる。胎土は密であるが、白色の細砂粒を多く、黒色粒・褐色粒を若干含む。白色針状物を多く含む。焼成は良好である。産地は下総産か永田・不入窯産と思われるが、小破片のため断定しがたい。

４は下総産の須恵器甕である。口縁部は 1/2、胴部も 1/2 強が遺存する。底部の遺存はわずかで、多くを欠損する。口縁部径は推定 16.6cm、胴部最大径は推定 19.8cm、器高は 18.8cm、底径は推定 13.0cmである。胴部最大径は胴部上位にあり、やや肩のはった器形である。胴部外面は平行タタキが施されている。最大径よりも上位の肩の部分には、横位ないしは斜位、最大径よりも下位は斜位のタタキである。胴部外面下位は手持ちヘラケズリが施され、タタキが消されている。また最大径部分を主体にナデが施されており、同様にタタキが消されている。その下方もナデにより、肩部と比べるとタタキの遺存がよくない。胴部内面は当て具痕がみられ、特に最大径部分は細かい凹凸が著しい。胴部中・下位はナデにより当て具痕がやや不明瞭となっている。色調はやや赤みを帯びた灰色を主体とするが、胴部外面下位は褐色味が強い。胎土はあまり緻密ではなく、茶褐色粒が目立つ。また白色粒の含有も多い。焼成は須恵器としてはあまり良

好でなく、断面の色調が褐色を呈する部分も多い。

5は土師器甕の底部を主体とする破片である。底径は8.4cmである。外面にヘラケズリが施されているが、その後のナデや器面の摩滅によりあまり明瞭ではない。内面はナデ・ヘラナデが施されている。色調は外面が黒褐色・褐色、内面が褐色である。胎土は白色粒・褐色粒・黒色粒等の細砂粒を多く含む。焼成は良好である。

6は丸瓦である。片側の側面の一部が遺存する。小破片であり、どちらが狭端面側でどちらが広端面側かわからない。凸面の側面側は面取りがされている。凸面と側面はナデが施されている。凹面は布目痕がみられる。かなり薄い破片である。産地は不明である。

7は鉄製品の刀子である。刃部の切先部分側と茎の茎尻側を多く欠損する。刃関・背関側ともに錆のため形状は不明瞭である。現存長は10.3cmである。刃部の幅は2.3cm、茎の幅は欠損部分近くで1.4cmである。刃部の背側の厚さは2mmである。茎の背側の厚さは4mm、刃側の厚さは3mmである。重さは32.68gである。

8は用途不明の鉄製品である。鎌の一部かとも思われるが、欠損のためか両側とも尖った部分があり、断定しがたい。現存長は6.7cm、幅は2.8cmである。重さは20.14gである。

図示した遺物の多くはカマド周辺と南壁際から出土している。1はP4の上面から出土した。2はカマド前の中層から出土した。4は南壁際の下層・床面に多くが散っているが、P4上部の中層から出土した破片と接合している。5は右袖部分の下層・床面から出土した。6はP3内下層から出土した。7は南壁際の下層から出土し、8はカマド左袖上の下層から出土した。出土状況に特に祭祀的な様相があるかどうか断定しがたい。4は広域に散っており、祭祀的な様相はないと思われる。

図示していない遺物破片量はやや少量である。土師器杯は、赤彩されたロクロ土師器杯、赤彩された非ロクロの土師器杯、赤彩されていない非ロクロの土師器杯がみられる。須恵器杯は火襷のみられるものがある。また胎土に白雲母の混入した新治窯産が若干存在する。

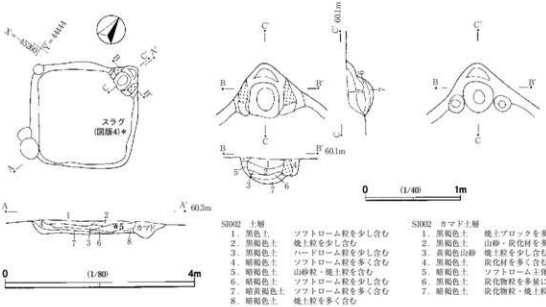
SI002（第8図、図版3・4）

形状・規模　平面形はほぼ方形である。隅カマドで、出入り口ピットも検出されなかったため、主軸方位が不明である。やや北から傾いているが、カマドの左側の壁を北壁、その対面を南壁とすると、南北方向の長さは2.22m、東西方向の長さは2.32m、確認面からの深さは23cm～29cmである。仮に主軸方位がおおよその南北方向とすると、方位はN-30°-W、おおよその東西方向とすると、方位はN-60°-Eである。面積は確認面で4.75㎡、床面で3.62㎡である。

床面・壁溝　床面は中央部がやや低く、壁際がやや高い状態である。硬化面はみられず、軟質である。壁溝はみられない。壁はゆるく立ち上がる。

柱穴　本住居に伴う柱穴は検出されなかった。

カマド　北東隅とするか、北隅とするか微妙な位置であるが、上記の記述の関係上、北東隅部に位置するとしておく。煙道部は方形プランからやや突出しているが、確認面では焼土のみられる範囲がより北方に突出していた。両袖は山砂が遺存するが、その下部はソフトロームを多量に含む暗褐色土であり、前側は山砂が床面まで達していない。両袖内側及び火床面は赤く変色するほどには硬化していない。使用期間が短いものと考えられる。煙道部分は火床部からゆるやかに立ち上がり、壁の手前で一段テラス状に平坦面を構成して、さらに上方に立ち上がっている。カマド内堆積土は黒褐色土・暗褐色土であるが、おおむね上層で焼土ブロックを多く含み、下層で炭化粒を多く含む。カマド掘方は、火床部の両脇に浅い窪みが



第８図　SI 002

検出された。周囲からの深さは７㎝～８㎝程度である。

堆積土　黒褐色土・暗褐色土主体で、最下層と壁際はソフトローム粒を多く含む。

出土遺物　鉄滓のみ写真で提示した（図版４）。鉄滓は最大長 7.5㎝、最大厚 3.5㎝、重さは 205 g である。東壁際中央やや南寄りのところから出土した。遺物量は非常に少量であり、図示した土器はない。鉄滓のほかは土師器甕・土師器杯・須恵器甕が出土した。土師器甕と土師器杯は細片であり、全体に摩耗しているため、区別が難しい。また須恵器甕も黄褐色を呈しているが、外面に平行タタキをもつものがあるため認識できた。タタキは縦位のものと思われる。外面が摩耗しているものは土師器との区分が難しい。

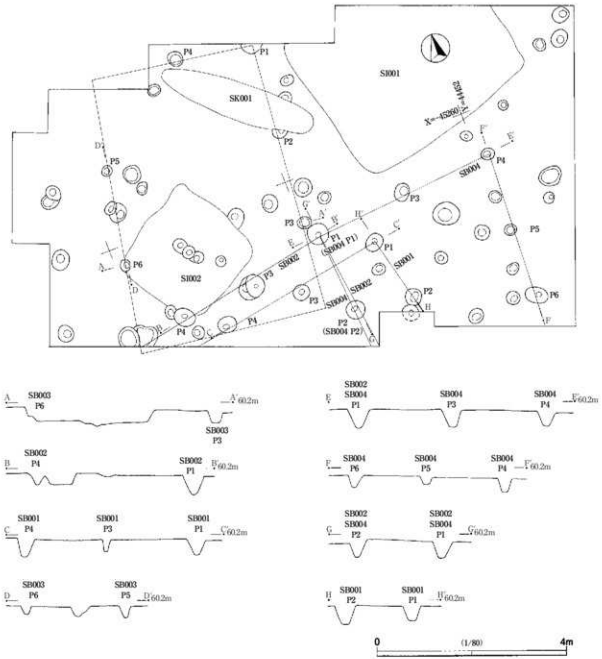
第２節　掘立柱建物及びピット群

SB001（第９図、図版３）

調査区内では多数のピットが検出されたが、南側で検出されたピットの並びを SB001 とした。やや不明瞭であるが、倜柱東西棟建物と思われる。桁行２間以上、梁行１間以上の建物と思われる。規模は不明である。棟方向はＮ -81°－Ｅである。柱間寸法は、桁行では 1.8 m～ 1.9 m、梁行では 1.5 mである。柱掘方は桁行・梁行とも大差がなく、円形・楕円形で、径は 30㎝～ 40㎝、確認面からの深さは 30㎝前後である。出土遺物はなかった。他の掘立柱建物と重複する。

SB002（第９図、図版３）

SB001 よりも北西側のピットの並びを SB002 とした。倜柱東西棟建物と思われる。東辺のピットが SB002 であるのか、SB004 であるのか不明瞭である。ともに可能性があるものとして図示した。桁行２間以上、梁行１間以上の建物と思われる。規模は不明である。棟方向はＮ -80°－Ｅである。柱間寸法は、桁行では 1.65 m～ 1.75 m、梁行では 1.75 mである。柱掘方は円形・楕円形で、径は 40㎝～ 50㎝、確認面からの深さは 25㎝～ 47㎝である。北桁行中間柱穴東側（P3）が深く、西側（P4）が浅い。P1（SB004



第９図　掘立柱建物及びピット群

P1）は36cm、P2（SB004　P2）は38cmである。土器片が少量出土したが、図示する遺物はなかった。SB001・SB003と重複する。また上記したように本遺構の東辺はSB004の西辺であるかもしれない。

SB003（第９図、図版３）

調査区内で西側のピットの並びをSB003とした。側柱南北棟建物である。一部で柱穴が不明瞭であるが、桁行３間、梁行２間の建物とみられる。規模は推定値であるが、桁行方向5.8 m～5.9 m、梁行方向3.5 m～4.0 mである。棟方向はN - 4°～9° - Eである。柱間寸法は、桁行では1.9 m～2.0 m、梁行では1.6 mである。柱掘方は、円形・楕円形で、径は25cm～45cm、確認面からの深さは20cm～30cmである。出土遺物はなかった。SB001・SB002と重複する。

SB004（第９図、図版３）

調査区内で南東側に所在するピットの並びをSB004とした。不明瞭であるが、側柱南北棟建物と思われる。西辺のピットがSB004であるのか、SB002であるのか不明瞭である。ともに可能性があるものとして図示した。桁行２間以上、梁行２間の建物と思われる。規模は不明である。棟方向はＮ－２°－Ｗから Ｎ－２°－Ｅの間である。柱間寸法は、桁行では1.5ｍ～1.8ｍ、梁行では1.9ｍ～2.0ｍである。柱掘方は円形・楕円形で、径は25㎝～50㎝、確認面からの深さは14㎝～38㎝である。東桁行中間柱穴北側（P5）が浅い他は、30㎝～35㎝前後である。鉄製品の破片が１点出土したが、図示する遺物ではなかった。SB001と重複する。また上記したように本遺構の西辺はSB002の東辺であるかもしれない。

ピット群（第９図）

以上の掘立柱建物とは別に、柱列の並びを顕著に認めることができなかったピット群が存在する。それらは出土遺物がなく、時期的にも不明瞭であるが、掘立柱建物の可能性が考えられることから本節で掲載した。

掘立柱建物とした以外のピットの基数は38基である。重複したものも別々に数えている。平面形は円形・楕円形であり、方形のものは存在しない。径は小さいものでは20㎝強（22㎝）、大きいものでは50㎝～60㎝弱（58㎝×50㎝）である。確認面からの深さは浅いものでは10㎝弱（７㎝）である。掘立柱建物を構成するピットよりも深いものはない。径は20㎝～30㎝台、深さは10㎝台から20㎝台のものが多いが、30㎝台のものも少なからずみられる。

第４章　まとめ

第１節　楽ケ谷Ⅰ遺跡の様相について

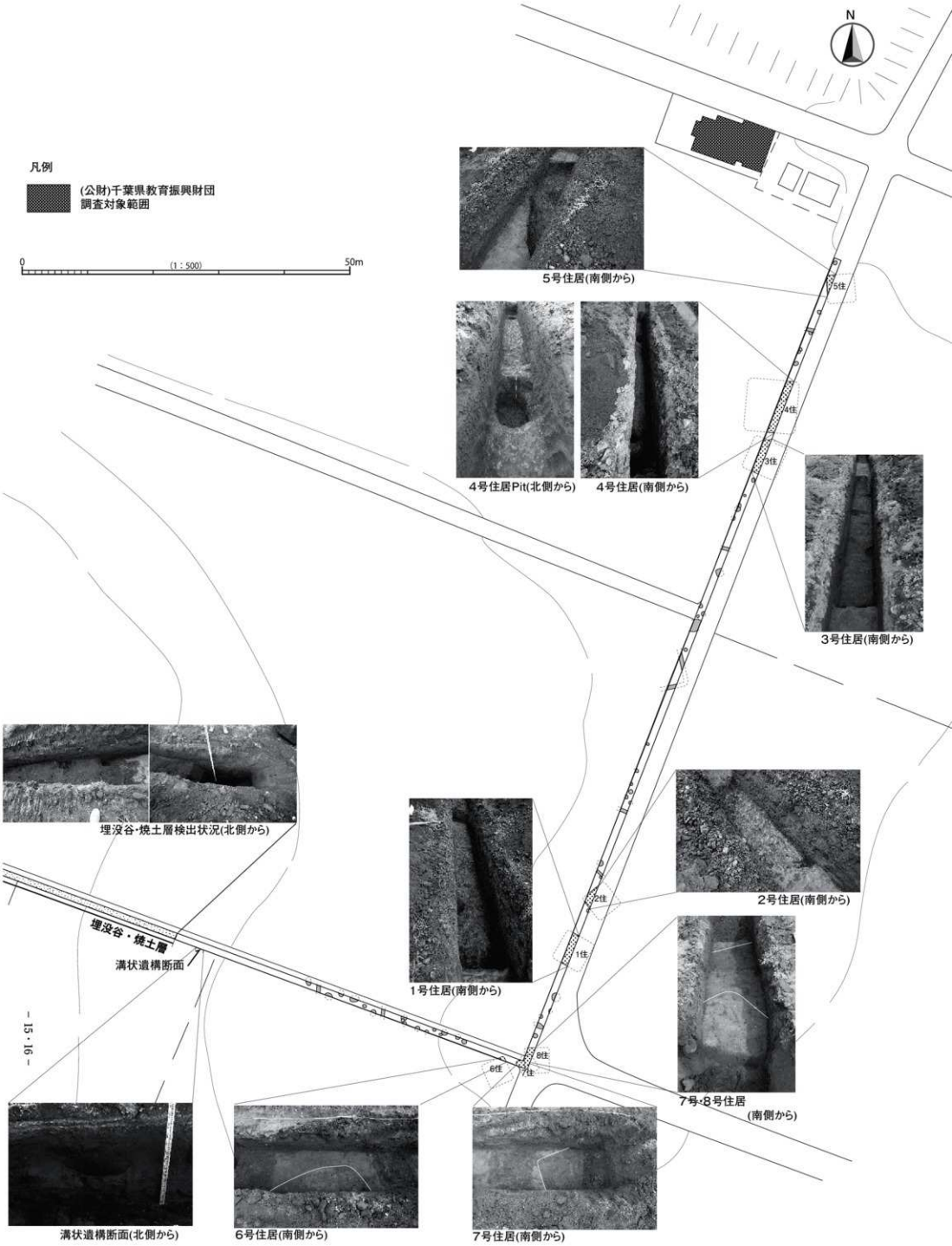
調査区内からは、縄文時代の陥穴１基、奈良・平安時代の竪穴住居が２軒、掘立柱建物が４棟、ピット群が検出された。

旧石器時代については、確認グリッドを１か所設定して発掘したが、石器の検出はなかった。

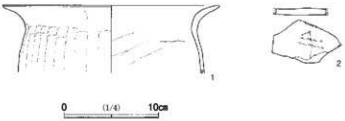
縄文時代の陥穴は、遺物が出土していないが、遺構形状から草創期後半～早期前半に頻出する溝型陥穴と思われる。

奈良・平安時代の竪穴住居は２軒で、その間の距離は３ｍ弱である。調査区の面積がわずかに72㎡弱であることを考慮すると、遺構密度は高いといえよう。掘立柱建物は４棟で、重複が著しい。これも遺構密度は高いといえる。そのほかのピット群はピット38基であるが、その一部は掘立柱建物となる可能性が高いと思われる。しかし、調査区が狭小であるという制約もあり、掘立柱建物としての明瞭な把握ができなかった。奈良・平安時代の竪穴住居のうち、SI001は出土遺物の内容から８世紀後半の第３四半期頃に位置づけられると思われる。SI002は出土遺物が少なく、詳細な時期の決定がしがたい。掘立柱建物及びピット群も遺物の出土が非常に少なく、奈良･平安時代のものと思われるが、詳細な時期は不明である。

楽ケ谷Ⅰ遺跡においては、千葉県教育委員会による工事立会が行われているので、今回の調査成果の参考資料として紹介したい。工事立会では竪穴住居８軒が検出されている（第10図）。これらは出土遺物が少ないため、詳細な時期の決定は難しいが、多くが奈良・平安時代に帰属するものと思われる。１軒が古墳時代に帰属する可能性も考えられるが、奈良・平安時代の遺物も出土しており、確実に古墳時代である



第10図　工事立会分全体図



第11図　工事立会分の出土遺物

とは断定しがたい。楽ケ谷Ⅰ遺跡の財団調査分は台地のかなり北方に位置するが、工事立会分は財団調査分から約145ｍ南方まで延びる範囲である。このことから楽ケ谷Ⅰ遺跡の所在する台地は奈良・平安時代を主体とする集落がかなり濃い密度で展開していると考えられる。

工事立会において出土した遺物は少量であり、そのうち２点を図示した（第11図）。１は４号竪穴住居から出土した土師器甕である。口縁部から胴部上位まで1/4弱が遺存する。口径は推定23.0cmである。口径が最大径と思われる。胴部外面は縦方向のヘラケズリが施され、胴部内面はヘラナデが施されている。色調は内外面褐色であるが、口縁部内面の一部に黒ずむ部分がある。胎土は白色粒・褐色粒・黒色粒・透明粒などの細砂粒を多く含む。焼成は良好であるが、外面はざらついている。内面は比較的滑らかである。

２は７号竪穴住居から出土した土師器杯の底部片である。小破片のためやや不明瞭であるが、非ロクロの土師器杯と思われる。底部外面に３本の線とそれに直交する１本の線を交差させた線刻がみられる。図の方向でみた場合、３本の横線のうち中央と下の２本は平行的で、やや右に下がっているが、上の一本は左に下がり、左側が中央の線刻に近づいている。横方向の線刻がなされた後に縦方向の１本の線刻が施されている。縦方向の線刻は一部が欠損部まで達している。「奉」などの省略形とも思われるが、文字ではなく、記号とみておきたい。色調は内外面とも淡褐色であるが、外面はやや赤みをもつ部分と黒ずむ部分がみられる。胎土は密であるが、若干褐色粒や白色粒がみられる。焼成は良好である。

第２節　楽ケ谷Ⅰ遺跡をとりまく歴史的様相について

楽ケ谷Ⅰ遺跡の東方には滝台遺跡があるが、滝台遺跡内で当財団の調査地点から約0.6kmのところで「山邊郡印」が出土している[1]。このことから楽ケ谷Ⅰ遺跡も山邊郡に属する可能性が高いと思われる。

「山邊郡印」は明確な楷書体であり、平川南氏によれば、８世紀の第３四半期である天平宝字年間前後の典型的な特徴を有しているとされている。

山邊郡は『和名類聚抄』[2]によれば、禾生郷、岡山郷、管屋郷、山口郷、高文郷、草野郷、武射郷の７郷が記載されている。萩原恭一氏は山邊郡の郷名比定を考察しており[3]、そのなかで滝台遺跡を岡山郷に比定している。萩原氏の考察に従えば、滝台遺跡に近接して位置する楽ケ谷Ⅰ遺跡も岡山郷内に比定される可能性が高いと思われる。

萩原氏は山邊郡の郷名比定を行った際、台地上に５郷を、海岸平野に２郷を想定した。海岸平野部の２郷については、いずれも河川沿いの地域を想定している。そして山邊郡の郷については台地上に多く、海岸平野部に少ないということから、海岸平野への進出にあたっては、古代において越えがたい何らかの支障があり、そのため古代の開発は海岸平野部よりもむしろ台地上の内奥部へと向かったと考察した。山口郷の代表的な集落の一つとされる山田水呑遺跡は、太平洋に注ぐ真亀川水系の支谷と印旛沼に注ぐ鹿島川

水系の支谷の分水嶺上にあって、かなり内奥に位置する遺跡である。楽ケ谷Ⅰ遺跡はそこまで台地内奥部に位置してはいないが、海岸平野に臨む台地端部からはかなり離れている。楽ケ谷Ⅰ遺跡の内容はわずかな調査であり、古墳時代から存在する可能性もあるが、これまでの傾向をみる限り、台地内奥部の谷津田及び山林の開発を契機として、奈良・平安時代に急速に開発が進んだ集落の一つと思われる。

太平洋に注ぐ九十九里沿岸地域の河川には、北から栗山川、木戸川、作田川・境川、真亀川、南白亀川などが存在する。栗田剛久氏・木島桂子氏は九十九里地域の大型古墳や古墳時代後期以降の集落の様相について考察を行っている[4]。その成果の一部を取り上げてみたい。

楽ケ谷Ⅰ遺跡が所在する真亀川水系では、両氏によれば、6世紀から集落が形成される遺跡はやや少なく、7世紀から8世紀にピークを迎える遺跡が多いことが指摘されている[5]。しかし南白亀川水系の遺跡として取り上げられた油井古塚原遺跡群は、南白亀川というよりも真亀川水系の遺跡と思われるため、この点を考慮すると、8世紀にピークを迎える遺跡の量がかなり増えるといえよう。また9世紀代まで続く集落も少なくない。

南白亀川水系では、6世紀から始まる集落は少ない。ピークを8世紀に迎える遺跡が多いが、9世紀代まで大規模に継続する集落も多いため、ここでは8世紀に限定せず、8世紀から9世紀にかけて盛んに集落が営まれた遺跡が多いとみておきたい。

大型古墳の動向をみると、栗山川、木戸川、境川・作田川水系にはみられるが、それらよりも南方の真亀川、南白亀川水系にはみられない。また木戸川水系では6世紀から7世紀にかけての集落も多い。

真亀川、南白亀川水系では、それらよりも北の作田川水系以北と比べて、6世紀代に集落が形成される遺跡は少ない。真亀川水系では7世紀代から集落が形成される遺跡が多く、9世紀代まで継続している。南白亀川水系ではその様相がさらに鮮明となり、8世紀から9世紀に大規模な集落が形成されている。

大型古墳の動向からは、作田川水系以北と真亀川水系以南では非常に対照的である。その様相は集落にも反映されており、真亀川水系以南では6世紀代の集落が少ない。真亀川水系では7世紀代から開発が行われ、9世紀代まで大規模に続いていく。また南白亀川水系では主として奈良時代以降に大規模な開発が行われている。南白亀川水系のなかでも、代表的な遺跡である大網山田台遺跡群は、奈良・平安時代に大規模な集落が営まれた遺跡群である。奈良時代以前には大規模な集落が形成されなかった地域であるが、奈良時代に至って大きな開発がなされた地域である。とくに掘立柱建物が多く検出された遺跡が多く、畿内的な景観がみられるといえる。

笹生衛氏はこのような大規模な開発の背景の一つとして、集落内の「富豪の輩」の活動だけに限定することはできず、背後に有力な権力者が存在したことを推定している[6]。笹生氏がその一つの例証として取り上げたのが、上総国内に存在する藻原庄などの存在である。藻原庄は現在の茂原市西部から長柄町東部にかけて存在したと推定されている初期荘園である。上総国司藤原黒麻呂が国司在任中に成立した荘園で、その時期は8世紀後半頃と推定されている。このような有力者による開発が南白亀川水系南方の地域において行われていたわけであるが、大網山田台遺跡群の開発も同様に中央的な様相をもつ有力者が背後に存在したものと思われる。

真亀川水系の遺跡群は南白亀川水系の遺跡群よりもやや早く、7世紀代から開発が始まった遺跡もあるが、南白亀川水系の遺跡群と同様の様相によって開発がなされていった遺跡も多いと思われる。

注１　丸子亘　1961「新発見の『山邊郡印』をめぐって」『古代文化』第21巻第１号
　　平川南　1999「古代郡印論」『国立歴史民俗博物館研究報告』第79集
　　栗田則久　2012「律令時代の八街－山邊郡印－」『図解　八街の歴史』八街市郷土資料館
注２　『和名類聚抄』は源順が承平年間（931年～938年）に編纂した書物である。
注３　萩原恭一　1988「郷名比定について」『東金市久我台遺跡』（財）千葉県文化財センター
注４　栗田則久・木島桂子　2005「古代の上総北東部－古墳時代後期からの集落と古墳の動向－」『千葉県文化財センター研究紀要24　－30周年記念論集－』（財）千葉県文化財センター
注５　注４栗田・木島論文で、真亀川流域、南白亀川流域として取り上げられた遺跡をみると、どちらに属するか微妙なものが含まれているように思われる。しかし論旨の傾向に多大な影響を及ぼすというほどのものはないと思われる。
注６　笹生衛ほか　1993『歴史時代（１）』房総考古学ライブラリー７　（財）千葉県文化財センター

写　真　図　版

調査地周辺の航空写真

図版 2

遺跡近景（南から）

遺跡近景（西から）

立川ローム層上層断面

SK001

SI001 全景

SI001 カマド上層断面

SI001 カマド

SI001 カマド裏側

SI01 掘方

SI02 全景

SI02 カマド上層断面

SI02 カマド

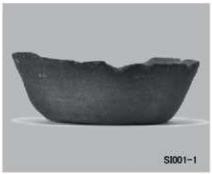
SI02 カマド掘方

SB01・02・04

SB03

発掘風景

図版 4


SI001-1

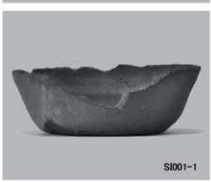
SI001-2

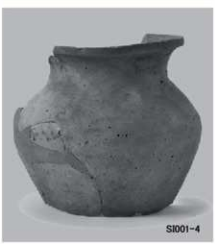
SI001-3

SI001-1

SI001-2

SI001-3

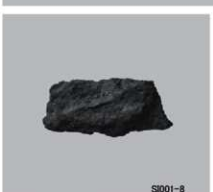

SI001-1

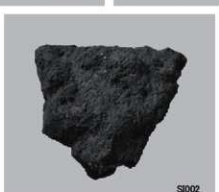

SI001-4

SI001-5

SI001-6

SI001-7


SI001-8


SI002

7 号住居（工事立会分）

出土遺物

報告書抄録

ふ り が な	やちまたしらくがやいちいせき
書 名	八街市楽ケ谷Ⅰ遺跡
副 書 名	滝台第６加圧機場建設に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻 次	
シ リ ー ズ 名	千葉県教育振興財団調査報告
シ リ ー ズ 番 号	第747集
編 著 者 名	糸川道行
編 集 機 関	公益財団法人　千葉県教育振興財団　文化財センター
所 在 地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809-2　TEL043-424-4848
発 行 年 月 日	西暦　2015年　11月　2日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
楽ケ谷Ⅰ遺跡 （らくがやいちいせき）	八街市滝台455の一部 （やちまたし たきだい）	12230	007	35度 35分 28秒 （世界測地系）	140度 19分 26秒	20150601～ 20150624	71.73㎡	農業用水配水用加圧機場の建設に伴う埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
楽ケ谷Ⅰ遺跡	包蔵地 集落跡	縄文時代 奈良・平安時代	陥穴　1基 竪穴住居　2軒 掘立柱建物　4棟 ピット　38基	土師器、須恵器、瓦、刀子	

要 約	楽ケ谷Ⅰ遺跡は太平洋に注ぐ真亀川の支流に開析された標高60ｍの台地上に立地する。調査区内では縄文時代の陥穴１基と奈良・平安時代の集落が発見された。奈良・平安時代の竪穴住居は２軒で、１軒は８世紀後半のものである。もう１軒は出土遺物が少なく、詳細な時期が不明である。掘立柱建物は４棟で、これも詳細な時期は不明である。また奈良・平安時代に帰属すると思われるピット群が検出されている。そのほかに、千葉県教育委員会による工事立会分として、奈良・平安時代を主体とする８軒の竪穴住居が検出されている。調査区は楽ケ谷Ⅰ遺跡が所在する台地全体の北方に位置する。工事立会分はその南方の範囲である。このことから楽ケ谷Ⅰ遺跡は調査区周辺から南方の台地上に、奈良・平安時代を主体とする集落が広域に展開するといえる。

千葉県教育振興財団調査報告第 747 集

八街市楽ケ谷Ⅰ遺跡

－滝台第６加圧機場建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－

平成 27 年 11 月 2 日発行

編　集　公益財団法人　千葉県教育振興財団
文化財センター

発　行　農林水産省　関東農政局
北総中央農業水利事業所
八街市八街に 456 － 1

公益財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡 809 番地の２

印　刷　株式会社　エリート情報社[印刷出版局]
成田市東和田 415 － 10